

一人を大切にすること

奨励	村上 みか【むらかみ・みか】
奨励者紹介	同志社大学神学部教授 〔研究テーマ〕近世キリスト教史、宗教改革

また、イエスは言われた。「ある人に息子が二人いた。弟の方が父親に、『お父さん、わたしが頂くことになっている財産の分け前をください』と言った。それで、父親は財産を二人に分けてやった。何日もたないうちに、下の息子は全部を金に換えて、遠い国に旅立ち、そこで放蕩の限りを尽くして、財産を無駄使ってしまった。何もかも使い果たしたとき、その地方にひどい飢饉が起って、彼は食べるにも困り始めた。それで、その地方に住むある人のところに身を寄せたところ、その人は彼を畑にやって豚の世話させた。彼は豚の食べるいなご豆を食べてでも腹を満たしたかったが、食べ物をくれる人はだれもいなかった。そこで、彼は我に返って言った。『父のところでは、あんなに大勢の雇い人に、有り余るほどパンがあるのに、わたしはここで飢え死にしそうだ。ここをたち、父のところに行って言おう。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください』と。』そして、彼はそこをたち、父親のもとに行った。ところが、まだ遠く離れていたのに、父親は息子を見つけて、憐れに思い、走り寄って首を抱き、接吻した。息子は言った。『お父さん、わたしは天に対しても、またお父さんに対しても罪を犯しました。もう息子と呼ばれる資格はありません。』しかし、父親は僕たちに言った。『急いでいちばん良い服を持って来て、この子に着せ、手に指輪をはめてやり、足に履物を履かせなさい。それから、肥えた子牛を連れて来て屠りなさい。食べて祝おう。この息子は、死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったからだ。』そして、祝宴を始めた。」

(ルカによる福音書 15章11-24節)

同志社の教育理念

皆さんご存知のように、同志社はキリスト教主義の学校ですので、このようにチャペル・アワーで聖書の言葉を聞き、またほかにもキリスト教について学ぶ様々なプログラムが準備されています。しかし同志社ではそれだけでなく、学校教育のあり方についても、キリスト教的な考えに基づいた「教育の理念」が明確な形で示されています。

なかでも重要なのが、同志社では知的な教育を行うだけでなく、一人ひとりの学生の個性を伸ばし、その精神をも養い、良心をもって活躍していくことのできる人物を育てる―良心を手腕に運用する人物を育てる―というものです。具体的に言うと、知識や技術を身に付けるだけでなく、身に付けた知識や技術を良心に基づいて用いることのできる人間を育てるということ、つまり良心に基づき考え、判断し、行動できる人間を育てる、ということなのです。周囲の意見や慣習に流されることなく、良心に照らして、何が良きことであるのか、何が適切であるのかを考え、判断ができる、そのような自立した生き方ができる人間が同志社から育っていくことが願われているのです。

このような人間が育つために、同志社では教職員に対しても要求がなされます。それは、新島襄の遺言に示されるように「いやしくも教職員は学生を丁重に扱う」というものです。学生がのびのびと個性を発揮して育ってくれるように、そして良心に基づいて行動できる人に育ってくれるように、教職員は学生たちを見守り、丁寧に扱うことを、新島は望んだのです。

一人を大切にしたい新島襄

そのような新島の思いを表すもう一つの言葉があります。それは今日のテーマに関わる言葉で、「一人一人は大切である。一人は大切である」というものです。これは同志社創立10周年の記念式典（1885年）の式辞で述べられた言葉です。新島はこの式辞で、自分がアメリカに行って留守にしている間に問題を起し、学校から追放された（つまり退学させられた）7名の学生に言及し、「彼らと共に（10周年を）記念したかった」「彼らのために涙を流さざるを得ない」と述べています。その言葉に続いて「諸君よ、一人一人は大切である。一人は大切である」と語ったのです。学生の側に落ち度があるのは明らかであるとはいえ、追放されてすでにいなくなっている学生たちのことを新島は思い、心を痛め、一人ひとりの学生の存在が大切であると自分に言い聞かせ、教職員や学生たちにも伝えたかったのだと想像されます。

新島はこのように言葉で学生を思うだけでなく、この言葉を実践することのできた人でした。この言葉が語られた5年前（1880年）に起きた有名な「自責の杖事件」でも、新島は同様の教育姿勢を示しています。教師たちの決定に対して学生たちが反対してストライキを起し、学生と学校側が対立する中、新島はどちらを責めることもせず、「すべては（校長である）自分の責任である。よって校長を罰する」と言って、杖で自分の手のひらを、杖が折れるほど打ったという出来事です。当時の学生の中には、このように反抗的な者、成績が良くない者、授業料が払えない者など、様々な問題を抱えた学生がいたようです。新島はこのような学生たちが見捨てられないよう、様々な配慮をしたと言われています。放っておけば、こぼれ落ちていきそうな学生たちを、新島は一人の人間として大切に扱い、彼らがこの同志社で育っていくことを願ったのです。

迷い出た羊をさがす

このような新島のあり方を聞くと、聖書の中にある「失われた羊」（ルカによる福音書15章1～7節）の話が思い出されます。皆さんも聞かれたことがあるかもしれません。100匹の羊がいて、そのうちの1匹が群れから迷い出たとき、羊飼いは残りの99匹を残して迷い出た1匹の羊を探しに行く、というイエスの語ったたとえ話です。迷い出た1匹の羊を思う羊飼いのように、新島は一人ひとりの学生を思ったのか、と想像されます。

一人ひとりを大切にすること、これは教職員だけでなく、誰にとっても、人間として生きる上で大切なことです。日々の生活の中で自分の周囲にいる人たち、自分が関わる人たちを大切にすることは、おそらく皆さんも、意義のある大切なことだと思われることでしょう。しかし、わたしたちはこれが十分にできているでしょうか。仲の良い人や気の合う人を大切にすることはできるかもしれません。しかし、私たちの周囲にはいろいろな人がいます。嫌いな人、関わりたくない人、そして自分を攻撃し傷つける人、そのような人々を、私たちは大切にすることはできるでしょうか。反抗する学生のために涙を流すことのできた新島襄は、それがかなりできていたようです。しかし私たちにできるでしょうか。「一人を大切にすること」というのは、とても美しい言葉ですが、とても難しいことです。どうしたらそれができるのでしょうか。どのような思いをもつとそれができるのでしょうか。

死んだ心が生き返る

先ほどお読みいただいた聖書の箇所が、この問いに対するヒントを与えてくれます。この話は、聖書で「失われた羊」の話に続いて出てくるもので、同じように迷い出てしまった息子のお話です。

ある息子が―おそらくそんなに年のいっていない若者でしょう―父親に財産の分け前を要求し、彼はそれを受け取って、そのすべてをもって旅に出ます。そして遠い国に行って遊んで暮らし、やがてその財産を使い果たします。ちょうど、その頃飢饉が起り、彼は食べるものにさえ困り始めます。そのとき、彼はわれに返って考えます。余るほどパンがある父のところに帰ろうと。そして父にこう言う「自分は天に対しても、そしてお父さんに対しても罪を犯しました。自分はもう息子と呼ばれる資格はありません。雇い人の一人にしてください」。そして彼が帰っていくと、父親は遠くから息子を見つけ、喜んで迎え入れます。そして、息子を美しく装わせ、祝いの宴を開いた、というお話です。

この話を聞いて、皆さんも思い当たる節があるのではないのでしょうか。特に若い年代の方たちは、早く親元を離れ、自立したいと思うのは当然のことでしょうし、その思いが勝って、親に対して反抗的になることもよくあることでしょう。この話の息子も、そのようなよくある若者の姿を反映しているように思います。彼は多くの財産を手にし、これで世の中に出ていろいろなことをやってみよう、これで何でもできる、そのような思いをおそらくもったのでしょう。勢いにまかせて、すべての財産を使い尽くしてしまいます。そして食べるものまで無くなって、生活が限界に達したとき、彼は自分のやったことを振り返り、その愚かさに気づくのです。自分は天に対しても、父に対しても罪を犯した、と。彼はおそらく恵まれた環境で、何不自由なく暮らしてきたでしょう。そしてそれが当然のことであると思っていたのでしょう。しかし、いざ親元を離れて独りになって食べ物さえなくなると、自分の無力さを知り、まだ一人前に食べていくことさえできない未熟な自分であるにも関わらず、何でもできるような気になって、やりたい放題やっていた自分の愚かさに気づくのです。そのとき、彼はこれまで良い生活の環境を与えてくれた父への感謝の思いをもつとともに、父に対して申し訳ないことをした、父を悲しませるようなことをした、と思ったのでしょう。こんな自分はもはや息子としての資格をもたないと考え、雇い人としておいてもらおうと決心して父の元に帰ります。すると父親はこの上なく喜び、彼を迎え入れてくれました。おそらく息子は、自分の愚かさを叱られ、責められると思っていたでしょう。しかし父親は怒らず、喜んで祝宴まで開いてくれたのです。

この話を聞いて、皆さんどのように思われるのでしょうか。この息子はやりたい放題やって、遊びほうけていたのに、お金が無くなると父親を頼って帰って来るなんて、虫が良すぎる、勝手すぎる、と思われるかもしれません。そして父親も、この身勝手な息子に対してこんなに優遇するなんて、甘すぎる、そう思われるかもしれません。実際、この話には続きがあって、息子の兄は、これを知って怒ったと記されています。自分は、弟のようにわがままを言わず、ずっと父親の言いつけを守って働き、まじめにやってきたのに、自分が友達と宴会をするのに子山羊1匹すらくられなかった。それに対して弟は働きもせずに遊びほうけ、財産を食いつぶしたのに、彼が帰って来ると、父親は肥えた子牛を屠ってやった、と抗議します。これはひどいではないか、おかしいではないか、と思ったのでしょうか。

たしかに、兄の言う通り、父親のやったことは不公平であるように見えます。まじめにやっていた兄の方に多くが与えられるべきで、弟にはむしろ罰が与えられてもおかしくない、そうしないとまじめに働いている者が報われない、と思われるでしょう。なぜ父親はこのようなことをしたのでしょうか。

父親は言いました。「この息子は死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだ」。この息子はただ父の元からいなくなっていただけでなく、その心がさまよい出て、失われた状態、死に等しい状態にあった。しかしその失われた心が戻ってきた、帰って来た、それによって彼は人として生き返ったのだ、だから喜びのは当たり前だ、と言ったのです。父親にとって財産が失われたことは、それほど重要でなかったようです。それよりも息子の心が失われたこと、人として、体は生きていても、魂の無い抜け殻のような状態になってしまったこと

が、父親にとっては大きな喪失であり、悲しみであったのです。だからそれが戻ってきたことが、何にも勝る喜びであったのです。父親にとっては目に見える様々な価値あるものよりも、目に見えない、人を生かす根源のありようが大切であったようです。

この息子のように心がさまよい出ることは、人生においていくつになっても起こることで、とくに若い時代にはよくあることです。新島襄はそのことをよく知っていて、学生たちの心がいつか戻って、その人がもう一度元気になり、生きることを始め、その人らしく成長していつかくれることを願ったのです。「一人を大切にすること」は、元気な人に良くしてあげることだけでなく、さまよい出た人、苦しみの中にある人、生きにくそうにしている人を見つけ、迎え入れ、寄り添うことを含みます。それによって、苦しみの中にある人の心が満たされ、その人が元気になり、また歩み始めることが可能になるのです。私たちも、羊飼いや父親のように、そして新島襄のような思いをもって、他者に関わることができれば、どんなに素敵なことかと思えます。

さまよい出たときには

最後に、このたとえ話は、誰かでなく、この自分がさまよい出たときの対処法についてもヒントを与えてくれていますので、それについて付け加えておきます。人間の心というのは弱いものですから、厳しい現実の中で、それに飲み込まれ、心が乱され、衰弱してしまうことがあります。その中で失敗や過ちを犯すことも、私たちの生活の中では起こりうることです。しかし、どのような状況になっても、この息子のようにあるべきところに立ち帰ることが許されていて、また新たに生き始めることができることを知っていただきたいと思えます。自分ももう駄目だとあきらめるのではなく、人としてやり直すことができるということを、どうぞ覚えておいてください。そして、それを見つけた人が、羊飼いや父親のように、それを迎え入れ、喜ぶことができれば、そのような人が一人でも増えれば、私たちの社会はもっと豊かで生きやすいものになるはずです。

そのような豊かな営みに私たちが少しでも加われることを、心より願います。

2019年6月5日 同志社スピリット・ウィーク春学期
今出川水曜チャペル・アワー「奨励」記録